

日本語総合授業における学習者の 思考訓練について

—— 学習者の自己対象化・相対化をめぐる ——

崔 明淑

I. はじめに

言葉を使って他人に自分の考えを解ってもらうことは、簡単なことではない。また、言葉というものが自分の表現意図通りに出てくるとも限らない。言葉を的確にだれでも解るように、解らなかつたら解るようにすることは、いきなり身に付くものではない。それは、訓練の課程を経て身に付くものだ。

そういった観点から見て、日本語総合の授業は学習者に思考の筋道を通す訓練になっていると思う。動機、仮説づくり段階からディスカッションの段階にかけて自分を対象化・相対化させる訓練をしていくと考えられる。そういった訓練は自分と問題（対象）に距離をおき、もう鳥類のように空中で問題を眺めさせる。そういった視点をもつことは、学習者の問題解決力アップにつながると思われる。ただ、視点というのは目に見えるものではない。学習者の受講後を追跡して調べることは簡単なことではない。けれども、問題解決力は、データから読み取ることはできると思う。そこから本レポートは、出発する。

問題解決力を上げる、または、上がったというのをどう証明できるだろうか。私は、自分と問題との距離を置き、問題と自分との関係を対象化・相対化すること自体が問題解決力アップの訓練だと考える。問題（対象）に直感・感情レベルに留まるのでは

なく、問題との距離を置き、自分自身にとって何かを考えさせる対象化の過程、また、他者に向けて相対化していくこと自体が言語による問題解決力だと思う。

自分の考えていることをどのように対象化・相対化していくか。自分の考えを対象化・相対化していくことが他者へ向かって思考の道筋を通すことになるし、他者説得力向上にも繋がるという考えだ。訓練によってこの方法を手に入れることこそ、問題が生じたときに、その問題と自分との関係を対象化、さらに相対化し、問題を解きほぐしていくのだという考えだ。

このレポートでは、問題解決力をどう得ていくかを、つまり「他者の目」というフィルターを通して対象化・相対化される思考の訓練がどう学習者に表れたかを探っていく。分析方法としては、学習者を相対化させるよう促進する教師、院生、ボランティア、学習者の発言とレポートを通して自己対象化・相対化の課程を考察していく。

- 仮説 ① 学習者の動機、仮説づくりは、自分と対象との関係を言葉により対象化（距離をおく）する訓練の課程である。
- ② 自分の思考を対象化する訓練の成果は、他の学習者の仮説作りインターアクションとして表れる。
- ③ ディスカッションは、対象化した自分の思考を検証し、相対化する段階である。

● 分析方法

- ① 授業記録を通して学習者の思考の対象化を探る。
 - なぜ、どうして、具体的という訓練キーワードを中心に
- ② 授業記録で、学習者間のインターアクションを見て、思考の筋道を通す訓練に乗ってきた学習者同士の発言を検証する。
- ③ 学習者は、ディスカッションを通じ、自分の意見の相対化に向け、どう高度を上げていったかを授業記録とレポートで検証していく。

Ⅱ. 分析より

1. 授業記録を通して学習者の思考の対象化を探る

◎ 訓練キーワードから

- ① 学習者の発言（内言）に徹底的に「なぜ」、「どうして」を聞く。

動機づくりの「なぜ」，「どうして」を含めて仮説作りの段階にかけてまた，学習者へのアドバイス発言においても進行役が立ち入り，「なぜ」，「どうして」を聞き通す。これは自分の考えを「なぜ」という言葉のフィルターを通し，自分と対象との距離を置く訓練である。この作業を通すと対象が自分から離れ，他者に向かって発信するためのものになっていく。ここでは，「なぜ」・「どうして」になかなか乗ってこれなかった学習者の記録を見ることにより，総合授業で要求しているものが，逆に鮮明に表れた例を挙げてみることにする。

例) ズンさんの場合 p 39

・ ・ ・ ・ ・

進行役；お風呂屋さんというのは，ズン君にとって，今，何ですか。

ズン；お風呂屋さん，私は日本人の真似して，シャワーして，ちゃんと入って，入ったら気持ちよかったです。

進行役；ふーん。そうすると，今お風呂屋さんに毎日行くんでしょう。

ズン；毎日。

進行役；うん，なぜ毎日いくの？

ズン；お風呂がないから・ ・ ・ ・ ・

進行役；お風呂屋さんに行くとどんな気分になるの？

ズン；おもしろい。

・ ・ ・ ・ ・

進行役；・ ・ ・ ズン君は，今，お風呂屋さんについて，毎日行って，何を感じている？何がいいと思う？

ズン；？？？

進行役；今，毎日行ってるんでしょう？そこに行くと，何がいい？とても行きたいなと思って行くんでしょう？ただ体をきれいにするために行くんじゃないで，もっと違う何かがあるんでしょう？それ，何です？

ズン；？？？

進行役；お風呂屋さんに行くと，どんな気持ちになる？どんな感じがする？

ズン；うーん。説明，仕方，ちょっと難しいけど，毎日お風呂屋さん行きたい。（断定的な語調）

進行役；行きたい。なぜ？

ズン；お風呂屋さんが広くて，きれい。皆さんの男の人がゆっくりして話ができます。

・ ・ ・ ・ ・

進行役；それが仮説じゃない？・ ・ ・ ・ ・ 今，話したことをもっとまとめてきて。

(仮説をまとめて来たズン君は、p 68でお風呂屋さんをテーマに選んだのは、お風呂屋の使い方が分からなくて恥ずかしい思いをしたのが動機で、お風呂屋さんはズン君にとって友だ・ の家のようなものだとしていた)

上のようなプロセスを動機・仮説作りでは要求していると思われる。

② 自分と対象を語る時「具体的」という言葉のフィルターを通し自分と対象との関係を他者に向けて分かりやすくする。自分が思ったことに対してその理由を具体的に話していくことは自分と対象との関係の対象化が進むことだと思われる。

例) p 23, パクさんの場合

進行役; パクさんにとって旅行とは、今のパクさんにとって旅行とは何ですか。

パク; 旅行は楽しみです。

細川; 大人になることと楽しむこととどういう関係があるの? (自分と対象との関係を問う)

パク; 旅行は人生だと思います。学校で学べないものを学べます。 . . . いろんな人によって社会勉強になる。

進行役; 社会勉強になったエピソードは?

パク; スリラー山で会社を辞めて旅行する人によってお金よりも自分がしたいことをすることが気に入った。それはそれでいいと思った。

進行役; それはそれでいいんだけど、ちょっと大人になるのはなぜ?

パク; うーん、一人で旅行したことは一回ぐらいあるのだけど、その時、自分のことは自分でやらなければならなかったから、少し男っぽいじゃなくて、難しいですね。

進行役; そのだから、その具体的なエピソードを書きましょう。

パク; はい、わかりました。

進行役; その素晴らしい人に会ったエピソードでもいいし、自分が一人でなにができなかったエピソードでもいいし、それをちょっと具体的に。

2, 授業記録で学習者間のインターアクションを見て思考の筋道を通す訓練に乗ってきた学習者同士の発言を検証する。

①総合授業の論理システムに乗ってきた学習者たちの往還関係の活性化

このシステムに乗ってくるということは、自己と対象との関係の対象化に慣れてく

ることを意味する。他者に向かって、習得した対象化キーワードなぜ、どうして、具体的―を使うことである。

前半部では仮説作りや動機作りに進行役に依存的だった学習者たちが自発的に論理的筋道を通すことを煽っていく積極性を見せる。

例) p 6 1 ジフンさんの仮説作りに参与する学習者たち。

進行役；ジフンさんにとって写真はなんですか。

ジフン；言葉で説明することは難しい。まだ言葉が浮かばない。

進行役；書いてあるのでもいいのいっぱいあります。（他の人の表情を撮るとき、自分もこういう表情で

撮られたいとジフンさんは思う）一なかなか仮設が引き出せないことに一

イヘヨン；暗室で作業するのがいいか、取るのがすきか、撮った写真を見るのが好きか、写真の中で重要

なこと・・・（ジフンさん；写真は目で見る世界よりきれい）

・・・進行役が質問の本題に戻す・・・

ジフン；撮ることです。

パクドクファン；景色より人物写真が好きですね。

ジフン；はい

パクドクファン；モデルに会ったとき、印象の人がいたらエピソードにしたらいと思います。

・・・ズンくと写真がなぜ好きか話す・・・

進行役；ジフンさんにとって写真は？

パクチエ；心の窓？

・・・

パクドクファン；言葉がないコミュニケーション

ジフン；考えてみます。（レポートでは写真は撮れば撮るほど知りたくなるもの）

②他の学習者の思考に対して適切なコメントができる

学習者たちは、総合授業の回を重ねることによって授業のシステムにも慣れ、コメントを振られたら適切なコメントができた。それは、授業に能動的に参加していたことを意味する。

思考の筋道を通す訓練に慣れてきた学習者が、他学習者の思考の筋道の具現であるレポートに対して適切なコメントを加えるところまで成長する。この論理性は、本来学習者が母国の教育のなかで覚えてきたものかも知れない。そういった論理性を、日本語教育を通してさらに、訓練をすることになる。この訓練は、母

語使用においても有効なものである。いわば、普遍的な言語生活の訓練になっているとも言えるだろう。

例) p 69 ズン君の場合

(「江戸時代からお風呂屋さんがあった。・・・広くていい気分だから」(レポート p 79) という文面の位地についての学習者たちの発言)

進行役; イヘヨンさん, 最後の三行についてどう思いますか。

イ; うーん (考える)

進行役; 書いた方がいいですか。書かない方がいいですか。

イ; 伝統的な文化を守る。

進行役; いや, 仮説にはね。ズン君の仮説は, お風呂屋さんは友だちのうち, それが仮説ですね。そう

したらそのあとの三行はどう? 最後の三行?

イ; 伝統的な文化を守る内容か, 最初にあるけど, 要らないと思います。最初にあるから。

進行役; ううん

.....

イ; 書き直したほうが良いと思います。・・・(ハンさんに振っていく)・・・

進行役; ハンさんどうですか?

ハン; 前に。

進行役; うん, 前に, 前に入れた方がいい。

ズン; 動機の方に入れた方がいい?

進行役; いや, 前に, どこか入れた方がいい。

ズン; 動機の部分?

進行役; それでもいい。でも, 動機はあるでしょう。あのびっくりしたことが動機でしょう? それがいいですよ。だけど, 仮説は, お風呂屋さんは友だちのうかが仮説ですから, それが最後に入ればいい。三行は要らない。

(ズン君のレポートには, このインターアクションは反映されなかった)

3, 学習者はディスカッションを通じ, 自分の意見の相対化に向け, どう高度を上げていったかを授業記録とレポートで検証していく。

◎ 自己相対化プロセス

① 学習者は, 自分の仮説をもって他者に向かって相対化を図る。

→ 自分の仮説を他者にぶつけ, 他者の意見を取り入れることによって, 丸みを与え,

自分の考えをより強固にすることができる。

例) カールさんの場合 (レポート p 69)

仮説; 真実を探すために一番いい方法は外国に住むことである。

ディスカッション; 自分の真実を探すプロセスは外国にだけあるのか?

カールさんは仮説に対する他者とのインターアクションを通じてどこでもできる (真実を探しに外国に行ったにも関わらず結局は自分の真実が一番近いところから出るはずだ) という結論をだしている。

→ 他者とのディスカッションをして自分の仮説を曲げずに、説明を付け加えて自分の考えをまたレポートを通して外言化する。

例) マイケル・ディロンさんの場合 (レポート p 66)

仮説; 私にとって村上春樹の日本は、日本の現代習慣、生活などがはっきり見えるようにしてくれるものである。

ディスカッション; 村上春樹の作品世界と仮説との関係を知るため、「コロッケ」を読んでみんなでディスカッションした。

ニコルさん; 特別な世界だから日本の理解に役に立つかも知れない。

湯川さん; 日本の若い男の人と女の人がカップルになっていく課程がよく描かれている。肉じゃがではなくコロッケというところが村上春樹っぽいところだ。

ハンさん; 雰囲気が悪い。気分が落ち込む。

三代; (「羊を巡る冒険」という小説から) 羊は別に日本と関係ない。(マイケルさんは、羊は19世紀日本に輸入されたもので日本に西洋の影響という隠喩だと思う)

マイケルさんは、コロッケを読むと日本の特徴(習慣、ここではお歳暮)だけでなく、日本の男女関係も見えるといった。また、彼は湯川さんが賛成、ニコルさんと三代さんが反対、ハンさんは納得してないと言った。また、小説は自分の立場で読むから違う意見は当たり前だという。つまり、村上春樹の日本とマイケルさんの日本とディスカッション相手の日本は別々に存在する。読んで変なこと不思議なことでも、読み終わって私の日本と比べると役に立つ。

Ⅲ. 結論

はじめに、自分と対象との距離を置く練習として「なぜ」「どうして」「具体的に」という訓練キーワードを中心に見てきた。次に、他の人の動機・仮説作りに参加するといった思考訓練に乗ってきた学習者たちのインターアクションも記録を通して見てきた。最後に、自分を相対化する課程であるディスカッションを通じ、自分の意見を説明し理解を得ようとする課程を考察した。

総合授業のシステムは、究極的には問題解決力アップにある。自分と問題との距離を置く作業である対象化・客観化していく過程自体が問題解決のプロセスだと思う。思考に道筋を通すことをいろんな進行役によって促されてどうすればレポートになっていくかを自分で考え、対象化・客観化へと進むのである。

思考の道筋を通す言語訓練は、総合授業のバックボーンである。この作業は問題（対象）との距離を置く自己論理から自己と対象との関係に対する「他の人の説得」という相対化した論理に繋がる。一でも、総合授業ですべての人が思考の対象化・相対化に成功したわけではない

問題に対する対象化・相対化が、どうして問題解決力アップに繋がるか。それは、思考の筋道を通す言語生活が他者とのインターアクションを通じ、他者説得に挑むからである。問題が生じたとき、逃げるだけでは問題そのものは解決しない。自分をくぐり抜け思考し、他者に向かって発信すること、そして他者とのインターアクションを通じ、自分の意見に丸みを持たせたり、自己論理に説明をつけたりするのである。

言語によるインターアクションにおいて問題を直感・感情レベルで言ってしまうとそれ以上、問題との関係は、先に進めない。もっと、他の人も納得できるような形にしなければならない。その第一歩はまず、自己論理をしっかり立てることである。自己論理（問題を対象化したもの）を立てることがまず他者説得の基本となる。自分の意見を通すためには、まず自分の考え、自分の論が必要なわけだ。私はそれが自己と問題との対象化であると見ている。

その次のステップとして、他者説得のための相対化がある。他者に向かってこの意見はどうかを聞いていく作業（総合ではディスカッション）は、本レポートでは相対化作業と見ている。問題に対する自分の認識（対象化したもの）をもって他者を説得していくことは、問題を解決しようとする以外にほかならないのである。なぜならば、このプロセスを経て、相対化した論理というのは、他の人に共感を得、妥当なこととして認められるからである。総合授業のレポートでは、自分の意見を最後まで

通している人も多い。その時にまた、自分の論を付け加えている。自分の論に説得力を持たせるための作業である。

また、こうやって繰り返しインターアクションが行われること自体が問題解決学習になっていると私は思う。問題を解決しながら、少しずつ普遍的なものへと進んでいくのだと考えている。

IV. 後書き

自分と対象との距離を置くことは、普段私たちの言語生活で習慣化・定着化しているかという点必ずしもそうとは言えない。直感レベルでものを言い、それがどうしてそうなるか考え抜くことを言語生活の中で私たちはどれぐらいしてきただろうか。総合クラスの自己対象化・相対化へ導くシステムは、学習者に言語を通じて、自分を「論理」という一本の糸にビーズ（考え）を通していく訓練になっている。それが軌道に乗ってくると学習者は、思考する力、話す力、書く力が自然についてくると思われる。

また、それは究極的には問題解決力を育てることに繋がる。

ベネッセの新聞広告にこんな文句が載っていた。

「公式」は

いつか、わすれる。

「文法」も、

いつか、忘れる。

「じぶんから学ぶ姿勢」は、

一生忘れない。

言語教育も教育という土台に成り立っているという観点から考えると、日本語の語学力という「魚」を与える教育ではなく、思考する「魚を釣る方法」を教えるのが「教育」という大きな枠組みのなかに立つことができる。言語による思考の道筋を通す習慣は、「問題解決力」という一生忘れない方法を教える教育になるのだと私は考える。